



アカウミガメの回遊経路調査

飼育展示第一課 岡本 仁



海面まで降ろすためのカゴから大海原へ泳ぎだすアカウミガメ。

日本の太平洋に面した海岸は北太平洋で生活するアカウミガメの重要な産卵地です。毎年、多くの子ガメたちが日本の海岸から太平洋の大海原へと旅立って行きますが、その後は果たしてどこで生活しているのでしょうか？

この謎を明らかにするため、名古屋港水族館では2003年からアメリカ大気海洋気象局 (NOAA) と共同で、発信機を取り付けたアカウミガメ196頭の放流を日本近海などから行ってきました。これまでに得られたデータから、遊泳力が無い子ガメたちは、まず黒潮によって房総半島の東の沖に運ばれ、その後北太平洋中央部の暖流と寒流の交じり

合う、水温20℃ほどの場所にいることが分かってきました。この海域は、餌となる生物が豊富に生息しています。このことからここはアカウミガメの重要な育成場でもあることが判明しました。しかし、放流したアカウミガメの発信機は約1年半後ちょうどこの海域に達する頃に電池切れとなり、その後の情報を得ることができませんでした。

そこで、ハワイへの遠洋航海実習を行っていた愛知県立三谷水産高校の実習船『愛知丸』の協力を得て、2005年と2006年に、発信の途絶える海域からの放流を行いました。これにより、かつて言われていた、「アカウミガメがアメリカ西海岸を南下し、赤道流に乗って日本近海に戻ってくる」という仮説を覆す情報を得ることになりました。実は、アカウミガメはアメリカ西海岸に達する場合もあるものの赤道付近まで南下することは稀で、むしろ餌が豊富にある育成場に留まる傾向にあることが分かったのです。これらの

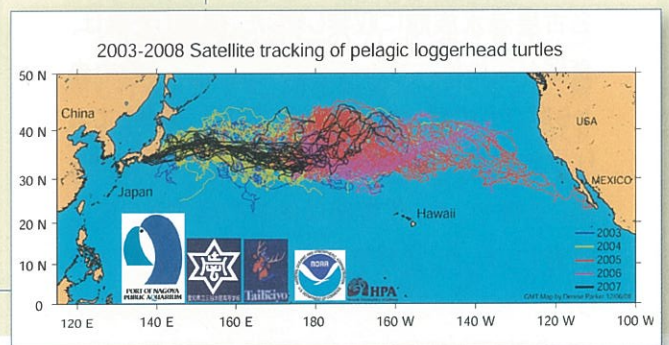
2003年から2007年に放流した子ガメの追跡調査経路のすべて。



発信機を取り付けたアカウミガメ。樹脂で甲らに取り付けられますが数年後には古くなった甲らと一っしょに剥がれ落ちます。

知見は、アカウミガメの一生から見るとほんの一部分のことですが、保護対策を講じていくためには非常に貴重な情報となるでしょう。

また、今年4月9日には、『愛知丸』の協力のもと、屋久島の沖約50kmから発信機を取り付けたアカウミガメの子ガメ29頭を放流しました。屋久島は多くのアカウミガメが産卵する場所として有名です。ここで生まれた子ガメがどのように育成場へと移動していくのかということについて、今回の放流でまた新たな情報が得られることが期待されます。



わたしのスケッチブック

クラウンアネモネフィッシュ *Amphiprion percula*

ニューギニア島周辺に生息し、日本にもいるカクレクマノミとよく間違えられます。ごく近い種類なので無理もないことですが、白い帯の周りに黒い縁取りがある方が本種です。有名なアニメ映画の主人公にもなりました。映画の舞台と分布域を考えると本種がこの映画の主人公であることが分かります。



飼育展示第一課 柿添 太